

日琉祖語音韻論概説(β)

音素編

ユリウス暦 2020 年 1 月 8 日

著重眞雪

(Twitter@Majukyisanapey の眞雪の方)

内容：

日琉祖語の音韻論の概説です。音素と、音素配列論について述べています。

出典を書くのは面倒なので書きません。

注意：

基本的に信用しないこと。

無印を 1 月 8 日の数分間配布していましたが、これはすぐに破棄しましょう。

音素

ここでは、日琉祖語 proto-Japanese-Ryūkyūan に再構 reconstruct される音素 phoneme について述べます。音素とは、特定の言語において、ある単語をあるもうひとつの単語と区別する機能のある最小の単位を表す術語だと、ここでは思っています。

母音

短母音

日琉祖語には、以下の単母音 short vowel が再建されています。再構 reconstruction とは、与えられた子言語 descendant language から、記録されていない unattested 祖先の言語の特徴を再構築することを意味する術語で、再構ともいいます。この PDF ではどちらも使いますが、特に意味上の違いはありません。

再構した語形もしくは音素は一般的には直前に 〈*〉 (アスタリスク) をつけます。私は以前勘違いしていたのですが、アスタリスクを音声表記を表す 〈[…]〉、音素表記を表す 〈/…/〉 の中に書くか否かは、たぶんとくに決まっています。

表 1 日琉祖語の通説上の単母音

| | 前舌 | 中舌 | 後舌 |
|---|----|----|----|
| 狭 | *i | — | *u |
| 中 | *e | *ə | *o |
| 広 | *a | | |

この PDF を読む人は、日本語の母語話者であることが想定されています。したがって、ここでは現代共通日本語の母音体系と概ね対応していると考えられる、上代近畿語の母音体系との対応 correspondence をともに示し、理解を深めます。

表2 日琉祖語の主要な短母音の対応

| 琉球祖語 | 日琉祖語 | 上代近畿語諸方言 | 現代共通日本語 |
|------|------|---------------------------------|---------|
| *a | *a | a | a |
| *e | *e | i ₁ ~ e ₁ | i ~ e |
| *o | *ə | o ₂ | o |
| *i | *i | i ₁ | i |
| *o | *o | u ~ o ₁ | u ~ o |
| *u | *u | u | u |

非短母音

日琉祖語には、以下の短母音ではない母音が再建されています。

表3 日琉祖語の主要な非短母音

| | -i | -u | u- | i- |
|---|-----|-------|-------|--------|
| a | *ai | *au | *ua | *ia |
| ə | *əi | (*əu) | *uə | *iə |
| o | *oi | (*ou) | (*uo) | (*io) |
| u | *ui | — | — | (*iu?) |

括弧の中にある短母音ではない母音は、通説的ではなく存在するのかが疑わしかったり、通説的ではないがおそらく存在したりする母音で、大いに異論がありうるものです。

短母音ではない母音のうち iでおわるものは、下降二重母音 falling diphthong であったとする見解(ホイットマン)が有力です。また、全てが二重母音 diphthong であったとする見解(ユン)を採用する場合は、*i, *u が音節副音 non-syllabic であったこととなります。

非短母音の対応を示すと、以下の様になります。

表4 日琉祖語の主要な非短母音の対応

| 日琉祖語 | 琉球祖語 | 上代近畿 | 現代共通 | 真上代東国 | 上代遠駿 |
|-------|------|---------------|---------|-------|------|
| *ai | *e | ë | e | ə | ə |
| *əi | *e | ï (~ î) ~ ë | i ~ e | ə ~ i | ə |
| *oi | *i | ï (~ î) (~ ë) | i (~ e) | o | u |
| *ui | *i | ï ~ î | i | u ~ o | u |
| *au | *o | ô | o | 不明 | a |
| (*əu) | *o | ô | o | ə | ə |
| (*ou) | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 | 不明 |
| (*uo) | *u | ô | o | *u | *u? |
| *ua | *o | ô | o | 不明 | 不明 |
| *uə | *o | ô | o | 不明 | 不明 |

| | | | | | |
|-------|------|------|------|-------|------|
| *ia | *e | ê | e | [j]a | i |
| *iə | *e | ê | e | 不明 | 不明 |
| (*iu) | *u | u | u | i | 不明 |
| (*io) | *o | u | u | i | 不明 |
| 日琉祖語 | 琉球祖語 | 上代近畿 | 現代共通 | 真上代東国 | 上代遠駿 |

音節副音の表記についてここで少し話しておきます。少なくとも歴史言語学 historical/diachronic linguistics においては、一般的に大文字の〈V〉は、任意の母音を意味します；日琉祖語の*Vi——つまり、ある母音のあとに i がきている短母音ではない母音のこと——は、ハワイ大学系の研究者(ex. Alexander Vovin, Marc Miyake, John Kupchik, Alexander Makiyama, etc.)は〈Vy〉と表記します。また、Tokaimori(2019)系の再構の影響下にかつてあった一部の Twitter 日琉語界限の人は、全てが二重母音であったと解釈する場合があります、その場合は任意の音節副音を国際音声記号 International Phonetic Alphabet(以降 IPA と略します)の〈◌i〉を用いて書くかもしれません。

子音

日琉祖語には、以下の子音 consonant が再構されています。

表5 日琉祖語の通説上の子音

| | 両唇 | 歯茎 | 硬口蓋 | 軟口蓋 |
|-----|----|----|-----|-----|
| 破裂音 | *p | *t | — | *k |
| 摩擦音 | — | *s | — | — |
| 鼻音 | *m | *n | — | |
| 接近音 | *w | — | *j | — |
| 流音 | — | *r | — | — |

流音 liquid consonant(現代語の大部分のラ行)は、(上代近畿語の音声や現代諸方言の多数派、j への変化などを鑑みても)たぶん叩き音または弾き音 tap or flap consonant ですが、特に言及している先行文献が無いので特記しません。

少なくとも上代近畿語の濁音は、かつて*n または*m を伴った阻害音 obstruent であったとする説が有力です。

表6 上代近畿語の濁音の祖語形

| |
|--|
| *mp, *mt, *mk, *ms *np, *nt, *nk, *ns |
|--|

音素配列論

有坂・池上の法則

有坂秀世(1931 から 1933)と、その同時期に池上禎造(1932)によって発表された上代近

畿語に化石的に見られる音節 syllable の並び方に関する法則を有坂・池上の法則、もしくは有坂池上法則、有坂の法則などといいます。

三則からなるこれは、けっきょくのところ、以下の表にまとめることができます。

表7 有坂・池上の法則

| | | |
|------------|----|----------------|
| 同時に出現しにくい | *ə | *a |
| 同時にほぼ出現しない | | *u |
| 同時に全く出現しない | | *o/*au/*ua/*uə |

語頭に流音は立たない

有名な話ですが、上代近畿語に語頭に流音の出現する固有語は存在しませんでした。中世日本語のころから roriori 「恐怖のため落ち着かない様」、rerorero 「舌がもつれる様」などの一部の固有語とみなせる単語が記録されるようになりましたが、少なくとも日琉祖語の時点ではおそらく、語頭の流音を禁じていたと考えられます。

語頭に濁音は立ったか？

上代近畿語は、附属語である nkötö-「ごとし」以外で二重子音が語頭にたつことはなかったとするのが通説でした。しかし、肥爪周二は、「川」、「散る」などの一部の、語境界の存在が確実な位置で規則的に濁音化が発生する単語の存在を指摘しています。これに対して主流派は現在のところ答えを出していませんので、日琉祖語の語頭に二重子音が存在したのかという問いにかえす答えは、「わからない」となります。

舌根調和

早田輝洋とジョン・ホイットマンは、日琉祖語に舌根調和 tongue root harmony が存在したと主張しています。これは、*tuku=nə 「月の」、*momo=na 「百の」などの属格 genitive case の助詞 particle *=na/*=nə の選択や、真上代東国語のオ段連体形 attributive form の選択が舌根調和によって行われていたという主張と、ユーラシア大陸北部には舌根調和の報告される言語が多く見られることに基づいています。母音調和 vowel harmony の主張の根拠に例外が存在しないわけではありません。

| | | | |
|------|----|----|----|
| 舌根前進 | *i | *u | *ə |
| 舌根後退 | *e | *o | *a |

おわりに

この概説は、本当に概説ですし、Twitter の日琉語界限人の研究の方がこれよりも多くの部分において進んでいます。(特に子音)